

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4371300163		
法人名	有限会社 ユニゾン		
事業所名	グループホーム誉ヶ丘		
所在地	宇城市豊野町山崎1728-1		
自己評価作成日	令和4年7月2日	評価結果市町村受理日	令和5年5月17日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和5年4月12日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

近くには、桜の名所の誉ヶ丘公園や県立少年自然の家等があり、自然豊かな環境下にあります。アグリパーク豊野や物産館には、新鮮な野菜や数多くの食材等が豊富に取り揃えてあり、利用者の買物の場や地域住民の憩いの場になっています。恵まれた環境の中、経験豊かなスタッフの介護のもと地域に根ざしたホームをテーマに、運営方針の実践と実現に向けて、利用者・家族・職員が共に助け合いながら、日々取り組んでいます。職員は介護理念「笑顔・楽しさ・無限大」の実現に向けて、試行錯誤を繰り返しながら利用者の思いに届くよう支援しています。日々、利用者と職員の笑顔が示すように、暖かく家庭的な生活を維持し、利用者・家族・職員が一緒になって、泣いたり笑ったり、時には起ったりしながら、最後に手を取り合って笑居あえるホームを目指します。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

ホームは緑の樹木に囲まれ鳥の鳴き声など居ながらにして季節を満喫できる。入居者はこれまでの経験から野菜の良し悪しや種子、苗の選び方育て方、調理方法などを職員へ伝授されるのが日課になっている。また、雑巾縫いをはじめ入居者の指導による保存食や掃きほうき作りなど得意分野を生かした出番が多く用意されている。いつでも気軽に散歩が出来る環境にあり、コロナ禍にあっても職員は菜園を見たり近隣公園に出かける事で入居者の自由な時間を支援している。開設時から地域にある協力医療機関との連携を図りながら重度化・終末期支援に取り組んでおり、家族との話し合いを重ねながら望まれる最終を支援している。また職員のチームワークが図られていることで思いに応える支援に繋がっており、家族からも感謝が寄せられ、100歳の方を筆頭にリビングに集った入居者と職員との会話は賑やかで、来訪者を満面の笑顔で迎えてくれるホームである。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	玄関や事務所にも掲示しており、朝礼時に唱和することにより、日常的にな意識付けと実践に向けた取り組みを行っている。	開設時からの理念であり、ケアの指針として職員にはしっかりと浸透している。新たな入居者には、理念を通じてホームのこれまでの説明し、入居者に日々関わる中で理念に立ち返るようにしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	近隣からの野菜等の差し入れや散歩中の声かけなども続いている。豊野町の一員として、子ども食堂やひまわり園整備に参加している。	地元からの野菜の差し入れは以前から続いており、コロナ禍で久々に近隣に出かけた際には、「やっと出で来たね〜！」と声をかけてもらうなど、変わらぬ関係性ができている。管理者は地域の代表者と協働で熊本地震を機に始めた“こども食堂”に毎月ボランティアとして参加し、地域振興の一環としてひまわりプロジェクトに協力している。	本年度は中学生の体験学習に2名の生徒を受け入れ、入居者の100歳の誕生日を共に祝う等交流の機会がもたれている。コロナ禍以前まで続いていた小学校などとの交流再開も待たれるところである。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議や小中学校の体験学習の場面での認知症やグループホームの役割について説明する機会がある。今年度は新型コロナウイルス関連の為、会合など自粛している為、機会が少ない。	/	/
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1回資料配布をしている。コロナのために集まることができない分ご家族との連絡をこまめに行って意見をいただくようにしている。	運営推進会議は書面審議が続いており、行政には直接手渡ししながら意見を聞き、家族等へは郵送にてホームの現状を発信している。直近の報告書には散歩に出れるようになった入居者の声や、「公園散歩が戻ってきて嬉しい」など地域住民の思いを伝えている。新人研修を含むホーム内の勉強会について紹介し、身体拘束についても取組状況を紹介している。	新年度は会議の直接開催を検討しており、実現に向けて関係者との連携が期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	市町村や、地域包括支援センターの方々とは、日頃から関係性作りを行っているが、今年度は電話連絡やメールなどのやり取りになっている。取り組みなどを伝える機会は以前に比べると減っている。	行政には運営推進会議の報告書を直接届け、ホームへの意見や要望を求めている。包括センターの依頼で認知症啓発活動に尽力し、認定調査には職員が立ち会い入居者の現状を伝えている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束のないケアはホームの理念であり、残職員が最重要ケアとして理解できている。新人研修や月例の学習会を通して再確認しており、施錠することの弊害も理解している。	身体拘束は行わないことを共通認識とし、定期的な勉強会で日頃のケアを振り返るようにしている。気になる言葉使いについて、急いでいる時などにどうしても口調が強くなる時があるとしている。センサーマットを夜間のみ使用しているが、入居者自身がポータブルトイレに移動する際に安全確保のために利用しており、家族への説明と了承を得ている。	スピーチロックについては職員の発した一言が入居者に及ぼす影響について、今後も互いの言葉づかいに注意し合うような環境作りや、会議での検討会が必要と思われる。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	高齢者虐待防止関連法について職場内学習会を行なっている。これに伴い、職員のストレスケアについても同時に行うようにしている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	学習の機会は設けているが、実際に活用事例がなく、実際に行うにおいては専門家に相談できるよう司法書士との連携は行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	重要事項説明書により十分な説明を行い、本人や家族の理解を得ている。入所後も、疑問や意見などに答えられるよう、面会時などこちらから声かけし、不安解消に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日常ケアの中で利用者の意見や訴えを引き出す努力をしており、外出や、自宅への一時帰宅など、家族の協力もあり、少しずつ実現すよう努力している。しかし、今年度は新型コロナウイルス感染予防の為に外出や面会など規制させていただいている	社会の流れとして面会や外出が少しずつできる状況となり、入居者の「散歩に出たい！」との声にいつもの公園まで出かけている。現在、利用料は全員の家族が引き落としとしている。面会の機会となるよう持参されていた方も来所の機会が少なくなっており、電話などで遠慮なく意見をもらうよう投げかけている。出された意見には全職員で共有し、早めの対応を心掛けている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月、主任者会議や職員会議を行い、職員の意見や提案を聞く機会を設けており、その場で対応策を検討し、早急に運営に反映している。年2回は個人面談を行い、意見の出にくい職員の意見集約に勤めている。今年度は全員で集まる会議などは中止している為、全員に意見や提案を理解していただくことに時間がかかっている。	これまでのように定期的に会議を開くことはできなかったものの、入居者の状況を見ながら時間の空いた時に話し合いをすることとしている。入居者の現状を共有すると共に職員意見を収集して、入居者支援や業務改善に反映し、個別面談の機会を設け、相談事などにも応じている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課規定により、個人評価、管理者による評価、面談による評価を行い、昇給等を行っている。又資格取得による手当支給も行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職場内学習会は毎月テーマに沿って行なっており新人教育も随時実施している。OJTとして、看護師や介護福祉師が日常のケアの中で、段階に応じた指導や助言を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	GH連絡会の学習会などの参加など計画していたが、新型コロナウイルス感染予防の為、会合や勉強会など中止になっている。代表者はSNSやメールなど活用し、新型コロナウイルス感染予防対策など相談しあう等、協力関係をとっている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	相談から利用までは、管理者や担当者が数回面談し、自宅訪問や1日体験を数回繰り返すなど、関係作りに心がけている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	自宅訪問や、ホーム見学などを繰り返し、徐々に家族の不安や要望など話しやすい関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	基本的には本人の思いを第一に考え、最善の対策を家族と共に考えていくように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者との関係は、徐々に家族に近い関係となっている。指示を受けることの多く、逆に指示することもある。喜怒哀楽を共にすることで、一体感のある関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	入所後も家族の不安は続いており、利用者の状態を正確に伝えることで少しでも不安を取り除くように努力している。特に新型コロナウイルスが流行ってきたことにより、面会制限がある為に家族の不安は増えている。感染予防対策や本人の様子などSNSや電話などで伝えるようにしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナにより面会など自粛しており、馴染みの関係性が薄くなってきている。	外部との接触を避け、神社の初詣やもみじや桜、彼岸花見学など馴染みの場所に出かけ、少しずつ元の状態に戻すように工夫している。長年の生活の中で職員との関わりや入居者同士の関係性も馴染みとなっており、互いの体調や食事量を心配されるようである。入居者の100歳の祝いを自宅でされた際には、対策を施し外出されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	一人が好まれる利用者もおられるが、より良い生活を支援するには、よきパートナーは必要であり、性格や趣味等を考慮し、利用者同士の係わり合いを深めながら、支えあえるような関係作りを支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	家族の訪問等は歓迎しているが、次第に関係は途切れがちになっている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居前の面接時からアセスメントを始め、本人本位の支援に努めている。定期的なアセスメントやカンファレンスにより随時情報を取り入れている。	入居者との会話は一人ひとりにわかりやすい表現を心掛けており、日々話をする中で思いを引き出し、プランにつなぐようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に本人・家族、関係事業者からの生活歴や生活環境、サービスの利用状況などの情報を聞き取り、ケース記録に掲載している。個人ファイルにて常に確認できるようにしており、職員の情報の共有化に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	独居生活の方も多く、入居後に24時間のアセスメントやカンファレンス等により、一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態や、有する力等の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	月1回のモニタリングを行い、入所者の情報を共有し、一貫したケアが行えるよう工夫している。	ケア会議の中で入居者の現状を把握している。プランには入居者・家族の意向を尊重し、職員の声を引き上げ立案している。入居者のこれまでの生活歴から援助方針には共同生活に慣れてもらうことや、家事、手伝いなどできることで役割を持ち、意欲的に過ごしてもらうなどを盛り込んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の記録には、日々の様子、ケアの実践・結果・気づきや工夫を24H対応で記録し、情報を共有化している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人・家族の状況やその時々要望に応じて、買物、受診、散髪、自宅訪問、介護保険訪問調査等の支援を行っている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	民生委員、ボランティア、警察、近隣、消防署への協力体制は出来ている。特に、小中学校との交流が多く、利用者も楽しみにしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力医療機関との連携は出来ており、定期的な往診や、健診を実施している。又、緊急時や、ターミナルにも対応でき、ており、本人・事業所・かかりつけ医のよりよい関係が続いている。	ホームから車で数分の距離にある協力医療機関の存在は心強く、もともとかかりつけ医であった入居者が殆どであり、月2回の訪問診療が行われている。また、主治医とは常に連携を図っており状況に応じて訪問を受けている。専門医については疾患内容に応じて受診先を検討しており、今年度皮膚科受診が必要な際は、100歳という高齢に配慮して訪問診療で対応している。歯科は必要な方に口腔ケアと治療を支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職は、日常のケアの中で得られた利用者の変化や気づきを看護師に報告又輪相談し、指示を受ける体制が出来ている。利用者は適切な受診や看護を受けられるようになっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	協力医療機関との連携は出来ており、入院時の対応や早期退院に向けた情報交換や相談が出来ている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	協力医療機関との連携が出来ており、毎年2～3件のターミナルケアの実践経験がある。家族や、職員との話し合いを繰り返し、不安を取り除き、本人が安楽に最後を迎えられることが出来たと思っている。	入居時にホームの方針を伝え、本人・家族の意向を確認している。殆どの方がホームでの最終を望まれており、今年度も主治医との連携やこれまでの経験を活かしお二人の支援が行われている。お一人は3か月という短いホームでの生活であったが、自宅からの入居という事もあり、一時帰宅してもらうなど本人・家族の思いに沿った支援が行われている。しかし家族も高齢である場合、面会で最期のひと時を過ごしてもらうことが困難な場合もあり残念であったと振り返っている。また、グリーンケアがゆっくりできなかった事を課題に挙げている。	本人・家族の不安を取り除きながら思いに応える最終の支援に取り組んでいる。家族が高齢になると重度化・終末期の際、面会が難しいことも現状のようである。今後も家族が心残りなど無いよう普段の関わりを一緒に出来るような働き掛けに努めていかれる事を期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時の対応マニュアルにより、学習機会を得たり、消防署による救急法の指導も受けている。年1回の講習を続けている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防計画により、年2回の昼・夜を想定した避難訓練を実施している。夜間帯の緊急招集を実施している。今年度はコロナによりマニュアル確認など施設内で行えるものにしている。	今年度は入居者の状態を再確認する机上訓練1回を実施している。備蓄はリストをもとに日用品や排泄用品などは管理棟で、米は管理者自宅で保管している。	ホーム周辺は樹木が多く火災への対策は特に重要と思われる。今後もホーム内の安全チェックとあわせホーム周辺に燃えるものはないかなど日頃の確認に期待したい。また、地域との協力体制を築きながら計画に則った年2回の災害訓練の実践が期待される。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	言葉使いやプライバシーの尊重については、「業務マニュアル」にて、意識付けや評価を行っている。	呼称は入居時にこれまでの呼ばれ方を家族に聞いており、苗字が多いが要望から下の名前でも対応している。入居者の尊厳に配慮した言葉使いや支援については、業務マニュアルの中で周知徹底を図っている。身だしなみの支援の一つとして訪問カットを依頼し、特に正月などの節目には入居者からも「正月頭」を要望されている。入浴後に保湿剤を使用される方には、家族の協力を得て不足しないよう心掛けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	個々の認知レベルやコミュニケーションレベルに合わせ、会話や係わり合いの中から、本人の思いや希望を引き出し、生活歴や、特技、趣味の情報を基に自己決定が出来るよう働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	日課の中には、時間が設定されているものもあるが、個別援助が基本であり、本人の希望に沿った援助を行なっている。自己決定の出来ない方へは選択肢を用意して、出来る限り自己決定を促している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	身だしなみは就寝や起床介助時に声かけを行ったり、介助を行う。おしゃれに関しては、外出時や、行事時など女性はお化粧したりと外出を楽しむ工夫をしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食材の買物や調理、下膳や食器拭き等利用者が係る作業は多く、利用者の能力や状態等を考慮しながら、個々のレベルにあった作業の提供を行っている。日課としての役割や、楽しみの1つとなっている。偏らない支援に心がけている。利用者からも「この食事はおいしい」とひょうばんは良い	献立作成から調理をホームで行っており、入居者は日々調理担当者とのやり取りや音・匂いを間近にしながら食事を楽しまれている。現在食材は感染症への対応から職員が購入に出かけており、入居者も早く一緒に出かけられる日を心待ちにされている。野菜はホーム菜園で育てたり、近隣や職員からの差し入れも多く、2月に竹の子料理を提供した際は「初物～嬉しかね～」と喜ばれたようである。おやつ時の飲み物も夏場は冷えた炭酸飲料や冬場はココアやレモンティーなど甘めで温かいものを用意している。職員も入居者と同じものを摂る事で思いを共有でき、気付きを今後活かしたり午後からの原動力になっている。	ホームの環境は春の山菜の宝庫であり、竹の子やタラの芽、わらび、つくし、ふきのとうにふきなど入居者と料理方法を出し合いながら食卓の一品になっている。入居者の出番にも繋がる取組であり変わらぬ支援に期待したい。現在の入居者の食形態は全員が常食であり、比較的弁当を持っての外出など取り組みやすいと思われる。引き続き食を楽しめる機会をもたれることを期待したい。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	糖尿病や便秘症及び腸閉塞の利用者に対して、かかりつけ医、看護師、栄養士の指導により献立作成されている。食事形態もミキサー食・きざみ食等個々の状態に合わせて提供している。水分補給は、好みの飲み物を積極的に提供している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	能力に応じた声かけや介助を行っている。自立であっても磨き残しは多い為、確認・磨きなおしを行っている。全く理解できない利用者も折られ、職員で複数で施行している。歯科往診や、居宅療養管理指導を利用している利用者も居る。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄の自立と快適性を目標にアセスメントを実施し、一人ひとりにあった排泄プランを24H体制で行っている。日中はこまめな誘導や介助により失禁も減らすことが出来、不快感を与えない工夫をしている。夜間は利用者によっては、睡眠時間を取ることもあり、おむつ交換時不快感が残らないように毎回清拭するなど工夫している。	日中は全員がリハビリパンツを使用し、トイレでの排泄を支援しており、夜間のみオムツに替える方もおられる。トイレはユニット内に3か所設けられ、使い慣れた場所や空き場所へ職員による誘導が行われている。夜間を中心にポータブルトイレを必要とされる場合は各自準備し、急な時はホームの備品を使用してもらっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘の原因や及ぼす影響については理解している。対策として、看護師や栄養士の指導のもと、献立に反映しながら水分補給に努めている。個々の気質的な問題に対してはかかりつけ医に相談し、服薬療法を試みている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	基本的には、毎日入浴を施工しており、時間や回数は利用者の希望も取り入れている。夜間入浴は希望はないが、排泄による汚染など適宜入浴促している。	毎日入浴ができるよう準備し、一日おきに希望や状況に応じ午前・午後で支援している。また汚染時は適宜入浴で対応し、不快なく過ごせるようにしている。入居者の中には「一日置きでよか〜！」や「今日は入らんでもよかごたる！」など、その日の体調で希望をはっきり伝える方もおられるようである。時には入浴剤で色や香りを楽しんでもらったり、入浴の順番も要望を確認しているが、一番風呂を望まれる方が多いようである。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者の生活習慣は理解できているが、環境の変化や体調・精神状態により安眠できないケースもある。安易に薬にたよることなく、日中の活動状況や適度な休息などアセスメントやプランに沿って継続した支援を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤情報提供書はいつでも確認が出来るようになっている。個々で介助は異なるが手渡しや口腔内挿入等により、確実な服薬確認をしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	編み物・調理・園芸など、内容は様々であるが、生き活きとした活動が見られる。入所者の高齢化に伴い、活動量の低下は否めないが、外出など、気分転換を図る様支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	利用者の希望により、散歩や買物、ドライブなどを行っている。家族の協力のもと、外出や外食散髪など出掛けられる方も増えてきた。新型コロナウイルス感染予防の為、昨年より機会は減っているが、実施している。	ホームの環境を生かし、敷地内や近隣の公園の散歩を継続している。また、感染症の対策を施し2台のホーム車両を活用し、彼岸花や紅葉見学、神社参拝などに出かけている。桜の花見では弁当を持参し楽しんでおり、満開の桜に「久しぶりに見た〜！」と、喜ばれたようである。家族にも面会の際は、公園の散歩などをお願いしており、人の出入りが多い所は避けて欲しい事など、感染症対策を申し添えている。家族の希望を受け100歳を自宅に帰省して祝われた方もおられる。その際はホームでの様子などから安全面への配慮など、管理者より必要なアドバイスが行われている。	入居者の中にはこれまでの経験から良い種子や苗の選び方など、野菜作りや畑の管理について職員にアドバイスをされている。今後も入居者が戸外に出る機会の一つとして野菜作りを楽しみながら継続されることを期待したい。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	金銭管理は全面的に管理している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話や手紙のやり取りはいつでも可能であるが、自ら電話したり手紙を出される方は稀である。暑中見舞いや年賀状は毎年一部分でも自力で書いて出されるよう支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ロビーには採光に工夫がしてあり、明るい環境となっている。光の調節はブラインド等にて調節している。室温は利用者に合わせて管理しており、玄関周りは季節の花や飾り物を展示している。	リビングの掲示物に「毎日すること」と職員の業務を記した中に、清潔に関する取組が記され、感染症への対応からこの数年は、特に掃除や換気、必要な消毒が徹底されている。玄関には入居者の指導を受けながら作った手作りほうきが下げられ、時には掃き掃除をされる方もおられるようである。ホーム周辺は長閑な環境であり、樹木や草花の開花、鳥の鳴き声など居ながらにして季節を感じる事が出来る。リビングの壁面は職員が中心に季節ごとに貼り絵などを作成し掲示している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファや和室を思い思いに活用されている。寒くなると日光を求めて椅子や座布団を移動し日光浴をされる光景が見られる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもをを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族に協力を仰ぎながら、居心地の良い環境づくりを支援している。使い慣れた物品や好みのもを持ち込まれることもある。	居室の環境は本人にとって居心地の良いものとなるよう、家族の協力を依頼している。入居時に馴染みや使い慣れた品の持ち込みを依頼しているが、寝具類は特に衛生面を考慮して損傷などがないか家族と確認している。家族からの手紙、思い出の写真が置かれた部屋や、昨今は衣類の収納は木製の家具より移動が簡単であるプラスチックケースを利用される方が多いようである。コロナ禍にあり衣替えは家族が持参したものを職員が収納を含め行っている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	家庭に近い環境づくりを行っており、トイレ浴槽以外には手すりの設置を行っていない。一人ひとりの状態把握により、残存機能を活かした、安全かつ出来るだけ自立に向けた支援を行っている。		